

ミニ展示 松江に伝わる^{とう}籐細工

はじめに

平成7年(1995)、江戸時代末期から現在にかけて籐細工を生業としている長崎家より、初代から6代の作品80点を松江市にご寄贈いただきました。松江藩の籐細工製作を代表する工房の各代の作品を追って見ることができる貴重な資料です。

本展では、ご寄贈いただいた作品の内、初代長崎仲蔵から2代福太郎、3代森山千代市の作品を展示し、江戸時代から続く松江藩籐細工の一端をご紹介します。

松江藩の籐細工について

松江藩に伝わる籐細工の技術は、「松江藩籐細工」として平成16年(2004)3月31日に鳥根県ふるさと工芸品の指定を受け、現代にもその技を伝えています。現在その技法を受け継ぐのは、3名のみです。6代目である長崎誠氏は、出雲かんべの里(松江市大庭町)にて籐細工の製作を続け、後継者育成にも尽力されています。8代目川口淳平氏は、積極的な製作と展示活動を行い、松江の籐細工の存在とその魅力を広めています。

松江藩の籐細工は、江戸時代末期、江戸住まいの下級武士の内職として始まり、文政期(1818~1829)頃に、雑賀町では籐のきせる筒の製作が行われていたと伝わっています。幕末の籐細工には、煙管入れがいくつか見られます。その後の明治時代の作品は、野点セットを入れる信玄籠や、花籠が多数作られ、煙管入れは見当たらないことから、時代の要望に応じて製作が続けられていたことがうかがえます。



一楽編



石畳編



花結編

参考文献

奥原国雄「美しき工芸技術 島根の風土が生んだもの」島根県文化財愛護協会、1970年。
藤原茂「日本における籐細工について—松江藩籐細工を中心に—」第57回歴史地理学会大会要旨、2014年。

展示作品

初代長崎仲蔵

- ごくぼそいちらくあみきせるいれ
・ 極細一楽編煙管入
- ・ 極細一楽編煙管入



現在に伝わる松江藩の籐細工の製作を続ける長崎家は、松江藩の料理方であった長崎仲蔵が、江戸にある松江藩下屋敷で籐細工を作ったことが始まりとされています。廃藩置県により松江に戻った後、自身の子供である福太郎に東京で籐細工を習得させ、帰松した福太郎とともに松江で籐細工を作りました。

2代長崎福太郎

- いしだたみあみすみとり
・ 石畳編炭斗
- ざるあみすみとり
・ 箆編炭斗



2代福太郎は、花結びを考案した人物です。花結びは、6弁の花弁が並んでいるように、編む技法です。花結びは、その後の長崎家の籐細工の大事な技法として伝えられていきます。

3代森山千代市

- はなむすびあみ
・ 花結編小物袋
- あじろあみへちま
・ 網代編糸瓜形掛花入
- ・ 箆編小原流籠



3代千代市の作品は、花籠や茶道具の炭斗などの籐細工が多く残されています。小原流とは、松江出身の小原雲心(名を房五郎)によって明治時代にはじめられた華道です。水盤に直接花をいける「盛花(もりばな)」をはじめとした近代いけばなのさきがけとなる生け方を創意したところに特徴があります。



展示の撮影は可能です。フラッシュはおやめください。